

## 設問 I

世界文学はかつて読むべき作品を網羅できるものと考えられていたが、現代の世界文学は圧倒的に膨大で、多様な言語の作品が日々生み出されており、その全体像を把握することが困難となった。この事態に対処するには、一国の文学を系統的に原文で精読する、翻訳で読んだ好きな作品から芋づる式に読む、テーマやシステムなどに着目して読むといった方法があるが、あれかこれかのような択一的思考に陥るべきではない。現代の世界文学に向き合う際の基本的な態度は、多くの言語を学んで原文を読み、同時に多くの作品を翻訳で読むことだ。どれだけ機械が進歩しても本を読むのは生身の人間であり、世界文学は読者が自分の読み方で作っていくものである。困難な読みの努力を通して世界の多様性に触れつつ、その中に相互理解を可能にする不変性／普遍性を見出していくべきである。

## 設問 II

## ≪解答例①≫

教養や趣味や課題のために「本を読む」として「文学を読む」とことは異なる。文学は生活に役立たない。それでも人間は文学を読む。それは、文学が生を豊かにしてくれるからである。もちろん、野球や将棋も生を豊かにするが、それらと文学との違いは、文学が言葉で語られている点にある。論理と感情を同時に含む言葉で書かれているからこそ、私たちは、作者の生が凝縮した世界の中に、筆者の言う不変性／普遍性を読みとり、それを自分の人生にひきつけて考えることができるのである。

若山牧水は、海に漂う白い鳥を「空の青 海のあをにも染まざ」と表現し、「白鳥はかなしからずや」と詠んだ。これを読むだけで、鳥と空と海はそれまでの鳥や空や海ではなくなり、牧水の孤独は読者の孤独につながる。これは読者の世界と生が広く豊かになったということだ。作者の言葉が読者の世界に触れて起きる化学変化の面白さ。それが、人をまた文学の世界に誘うのである。

≪解答例②≫

文学を読むことで、私は「いま」ではない時間に移動することができる。恐竜のいた時代に、平安時代に、百年後の未来に。そこには私の知らない社会や文化がある。人間にとって文学を読むとは、「いま」以外にいた／いるであろう、自分とは異なる人間を想像することである。

文学を読むことで、私は「ここ」ではない場所に行くことができる。作者に導かれて私は、ドイツの古城や宇宙空間や核施設を歩き回る。そこにも私の知らない社会や文化がある。人間にとって文学を読むとは、「ここ」以外にいる、自分とは異なる人間を想像することでもある。

こうした文学の作用は、筆者が世界文学を読むことの意味として述べている内容と重なる。文学を通して世界の多様性に触れ、「こんなにも違う」という驚きと、そこにいるのは「同じ人間だ」という共感を得て、自分が「いま」「ここ」にすることが偶然でしかないことに気づく。それが、文学を読むことの意味なのだと思える。